

# 献身の行方

## — Gaskell 短編小説の主従関係 —

林美佐

### 1 当時の使用人事情

Victoria 朝社会の多くの家庭において、使用人は欠かせない存在だった。使用人の雇用によって社会的地位を確立しようとする傾向から、上流階級だけでなく中流階級の家庭にも使用人は置かれるようになる。奴隷に近い状態でこき使われる使用人もいれば、怠け者の使用人に女主人が頭を悩ませるなど、雇い主と使用人の関係は様々だった。*Mrs Beeton's Book of Household Management* (1861) のように使用人の扱い方も含めた家政の手引書も出回るようになり、使用人の問題が当時の社会においてどれだけ重要であったかが窺える。

Jenny Uglow は、Elizabeth Gaskell の作品には、作者自身の生活における使用人の重要性が反映されているという。しかし同時に次のように述べている。

This delicate balance between intimacy and superiority, kindness and self-interest, is very typical of Elizabeth and her circle — another instance of the invisible ‘sunk fence’ between the classes. (Uglow 263)

Gaskell が描く女性使用人は、ヒロインを友人や家族のように支え、保護する傾向にある。しかしその関係は主従関係に基づいている故、友人や家族そのものと言いつけるには疑問が残る。今回 Gaskell の作品で取り上げるのは、女主人の生命に関わる危機を救った共通点を持つ女性使用人たちが登場する三つの短編である。三つの短編 *The Old Nurse's Story* (1852) *The Poor Clare* (1856) *The Grey Woman* (1861) には、それぞれ若い娘を支える乳母や小間使いが登場し、話を動かす原動力となる。

当時の小説には多くの使用人が登場した。主従関係は同性や異性の組み合わせによって大幅に異なるが、小説のヒロインの多くには、彼女たちの生活を支える

女性使用人たちが頻りに登場した。その描写も多種多様である。Emily Brontë の *Wuthering Heights* (1847) では女中の Nelly Dean が Catherine の人生を見守り続け、Anne Brontë の *The Tenant of Wildfell Hall* (1848) では、子供を連れて夫の元から逃亡する Helen Huntingdon に進んで同行する、乳母の Rachel が登場する。Charles Dickens の *A Tale of Two Cities* (1859) の Miss Pross は、革命後の危険な状態のフランスへ向かう女主人に付き従い、彼女の命を狙う Madame Defarge に一人で立ち向かう。

Gaskell の小説にも、多くの忠実な女性使用人たちが登場する。*Ruth* (1853) には、居候の Ruth に厳しさと愛情を持って接する Benson 家の女中 Sally が登場する。*Cranford* (1853) の若い女中の Martha は、女主人の Miss Matty の言いつけを守り、彼女が破産した後も変わらずに尽くし続ける。*The Moorland Cottage* (1850) では家族にないがしろにされる Maggie を励ます女中 Nancy が描かれ、*Crowley Castle* (1863) では女主人のために殺人まで引き受けてしまう乳母まで現れる。Pauline Nestor は、Gaskell は女主人と使用人の絆を重視し、使用人を家庭において必要不可欠として描いていると述べている (Nestor 40)。Patsy Stoneman や Deirdre D'Albertis も、Gaskell の作品の多くに登場する子供のいない中年女性の使用人は、仕える女性たちの母親代わりの役目を果たすと指摘している (Stoneman 32; D'Albertis 22)。

Gaskell は使用人との良好な主従関係をめざしていた。1864 年に書いたエッセイ *French Life* でも、女主人と女性使用人が家族のような関係で結ばれるフランスの主従関係を理想としている姿勢を表した。家庭を持ちながらも執筆活動続ける彼女にとって、使用人は生活に不可欠だった。子供を亡くした自分を支え、数十年間仕えた乳母の Ann Hearn を、Gaskell は “She is a dear good valuable friend.” (Chapple 760) と手紙に書いている。

批評家たちは Gaskell のこのような姿勢から、女主人と女性使用人の関係は主従関係よりも家族や友人に近くあるべきものと Gaskell が主張していると考えられる傾向にある。実際、当時の社会でも、子供が母親より乳母に懐き、主人が使用人を子供のように可愛がる例は数多く存在した。しかし、階級に基づいた主従関係であることに変わりはない。

Nevertheless, despite these personality clashes...it was a matter of continuing concern to the employing classes of Victorian England to inculcate the correct attitudes of obedience and subservience into their domestic staff. (Horn 121)

使用人に服従を求める当時の雇用関係を主張する Pamela Horn と同様に、Dinah Mulock Craik も、料理人や小間使いに愛情を注いでも、彼女たちを自分と同じ食卓につかせたり、客と同席させたりするつもりは全くないと述べる。

Providence fixed both where they are; and while they there remain, unless either individual is qualified to change, neither has the smallest right to overstep the barrier between them. (Craik 105)

親密でありながらも、確かに存在する主従関係が、女主人と女性使用人の関係をより複雑にしていく。この論文では、Gaskell の三つの短編に登場する乳母や侍女たちが、仕える若い娘たちの家族や友人のような存在としてどのように描かれるか、そして主従関係において生じる彼女たちの限界について考察することで、Gaskell によって表される当時の使用人の一面を明らかにしたい。

## 2 二組の主従関係

*The Old Nurse's Story* では、孤児になった幼い Rosamond に仕え、亡霊から守ろうとする乳母の Hester が語り手となる。乳母は、“Where parents were indifferent or neglectful, indeed, a nanny might be the only adult to provide affection and stability in the children's lives.” (Horn 75) と評されるように、子供たちに大きな影響を与える存在となりえた。Hester は仕事に誇りを持ち、女主人の忘れ形見である Rosamond を何よりも大事な存在とみなしている。

My mistress had asked me, on her death-bed, never to leave Miss Rosamond; but if she had never spoken a word, I would have gone with the little child to the end of the world. (Gaskell 12)

*Wuthering Heights* の女中 Nelly Dean は、死の床にある女主人 Catherine を回復させることもできず、また赤ん坊の頃に面倒を見ていた Hareton から引き離されるなど、仕えていた相手を守りきれない部分が目立った。しかし若い女主人から娘を託された Hester は、Rosamond を新たな主人に定め、守り通す。Hester は凍死寸前の Rosamond をつきっきりで看病し、亡霊に恐怖しながらも Rosamond の側を片時も離れない。Miss Furnivall に呼ばれたときも眠っている Rosamond を抱えて移動する様子からも、彼女の徹底ぶりが分かる。そして彼女の尽力によって、Rosamond は生き延び、その後成長して子供たちの母となる。Hester が Rosamond の子供たちの乳母として仕えている状況から見ても、彼女と Rosamond の間に築かれた信頼関係は続いていると窺える。

使用人たちにも序列関係があり、家政婦、次いで料理人が頂点に立った。女主人の子供を預かる乳母という役職もそれらに近い地位についたが、子供中心の生活なので、他の使用人たちとの交流に乏しい傾向にあった。だがこの話の舞台となる Furnivall 屋敷では使用人が少数であるため、Hester は Rosamond と共に、老いた従僕 James と妻 Dorothy、下働きの Agnes と親交を深める。Rosamond は Dorothy の膝に乗るほど懐き、彼らは和気藹々と過ごす。

その光景とは対照的な、もう一組の女性同士の親密な主従関係がこの話で描かれる。屋敷に住む Miss Grace Furnivall と、彼女の小間使いであり話し相手の Mrs Stark である。小間使いは、女主人に直接仕える立場にあり、身の回りの世話や外出の同伴など、信頼関係を築く機会も多く、家政婦や料理人に匹敵するほど高い立場にいられた。しかしその優位な立場故に他の使用人たちから妬まれやすく、孤立しがちだった。

She had lived with Miss Furnivall ever since they both were young, and now she seemed more like a friend than a servant; she looked so cold, grey, and stony, as if she had never loved or cared for any one...except her mistress... (15)

Hester と Rosamond とは逆に、この二人は部屋にこもり、使用人たちに親しく接する描写は見られなかった。Mrs Stark は Miss Furnivall の友人のような存在として登場するが、その関係は読者に排他的な印象を与える。美しいが高慢な Miss

Furnivall は Rosamond のような孤児ではないが、孤独な立場に置かれていた。母親は亡くなり、兄たちは不在、オルガンに夢中な厳格な父親と、一人の男性をめぐる敵対していた姉しかいない家で、Miss Furnivall の唯一の心の拠り所は Mrs Stark だけだった。

Mrs Stark の Miss Furnivall への態度は、他の人間を傷つける可能性もかまわずにスパイ役を務め、彼女の復讐に協力する場面からも、ひたすら盲目的な献身ぶりが窺える。Furnivall 家の惨劇は、いわば Mrs Stark の助力によってもたらされたと言っても過言ではない。姉とその子供を死なせた過去の罪に悩まされ続ける Miss Furnivall に、Mrs Stark はその罪の直視を遮るような行動をとりつつ、彼女に付き添う。二人が築く閉鎖的な空間は、友人のような関係と称されているにもかかわらず、寒々しく映る。

二組の主従関係が迎えた結末も対照的だった。Hester は仕える女主人の命を救い、Rosamond は結婚して子孫を残せた。しかし女主人の復讐に加担した Mrs Stark は Furnivall 家に亡霊をはびこらせ、罪悪感に苦しむ Miss Furnivall の死期を早めてしまう。Mrs Stark は女主人の友人のような使用人として描かれたが、Hester はあくまで Rosamond の乳母としての立場を崩さなかった。他の使用人たちと関わりを持つことで、Agnes や Dorothy から屋敷の怪異に関する情報を聞きだし、Rosamond を守り抜く心構えができた。女主人の世話のみに専念する Mrs Stark の姿勢が作り出した主従関係の閉鎖性が、悲劇の要素であると仮定した場合、女主人と女性使用人の友人のような関係を、Gaskell が必ずしも完全に推奨してはいないという可能性が生じる。更に友人のような使用人 Mrs Stark の否定的な描写と、対して乳母の位置から外れなかった Hester の肯定的な描写から、Gaskell が女主人と女性使用人の行き過ぎた関係を危惧していると考えられる。そしてそれは他の二つの短編にも現れている。

### 3 使用人としての役割

*The Poor Clare* では、十八世紀を舞台に、邪悪な人格にとりつかれてしまった娘 Lucy から離れようとしないうき添いの Mistress Clarke が登場する。この女性は父親から見放された Lucy を支え続ける唯一の人間である。Lucy の孤立する原因となった邪悪な人格は、語り手の男性が “My heart stood still within me; every

hair rose up erect; my flesh crept with horror.” (78) と述べるように、成人男性でも恐怖を感じる描写からその凄まじさが読み取れる。しかしそれは逆にそのような場面を何度も目撃しているにもかかわらず、Lucy の唯一の保護者であり続ける Mistress Clarke の精神的な強さを物語っている。

語り手が最初に出会ったとき、二人は世間に母子であると偽っている。また二人が Mistress Clarke の親戚が所有する農家に暮らしている状況から、Mistress Clarke が Lucy の父親から賃金をもらっていない可能性が高く、二人の金銭上の雇用関係は消滅していると思われる。賃金云々に構わず女主人に付き従った *The Tenant of Wildfell Hall* の乳母 Rachel のような献身的姿勢が、ここにも描かれている。Hester が Rosamond を実家に連れ帰った場合の姿も、この二人と同様であったと考えられる。だが擬似的な母子関係はあくまで表面上の姿である。Mistress Clarke は Lucy に対して “avoiding any address which appeared as if there was an equality of station between them” (70) と語られるように、偽りの母を演じながらも使用人としての立場を超えようとしない。そのような姿勢故に、周囲の人々も彼女たちが実の親子ではないと察している。

Mistress Clarke はヒロインを支える女性使用人としては、三つの短編では最も影が薄い印象を与える。何故なら他の二つの短編の Hester や Amante のように、Mistress Clarke の活躍によって Lucy が救われるわけではないからだ。むしろ Lucy を支え続けていく生活への弱音を吐く場面が出てくる。

I found out by instinct that Mrs Clarke had occasional temptations to leave Lucy. The good lady’s nerves were shaken, and, from what she said, I could almost have concluded that the object of the Double was to drive away from Lucy this last, and almost earliest friend. (89)

その理由としては、頼れる男性の出現によって、それまで一人で Lucy を守ってきた Mistress Clarke の気が緩み、弱さが現れてしまったとも考えられる。実際、最初は語り手との交流に消極的だった彼女は、“it seemed to lighten her heavy burden of care” (70) という効果をもたらしてくれる語り手を歓迎するようになる。しかし同時にこの箇所は、Hester が他の使用人たちと交流を持ち、Rosamond と

の主従関係が閉鎖的にならないようにした状況と類似している。Missress Clarke は、邪悪な人格が人目に触れて Lucy が傷つくのを防ぐ一方で、女主人が自分以外の人間と関わらなくなるのをよしとせず、語り手との交流を少しずつ受け入れていったと見ることもできる。

彼女が女主人の秘密を語り手に打ち明ける決意をしたくだりも、自分だけでは女主人を救えないという使用人の立場の限界を認識したことから生じたと考えられる。実の母親でもなく、父親のような後ろ盾となる力も持たない使用人として、Missress Clarke は女主人を社会的に保護してくれる可能性のある語り手に Lucy を託したのである。その後の話の展開で Lucy の災いを取り除いたのは、Lucy の祖母にあたる Bridget であり、呪いの原因を突き止め、その一部始終を見届けるのは、Lucy の夫になる予定の語り手である。つまり、血の繋がりのある肉親、そして結婚という手段で社会に正式な家族と認められる男性の登場によって、Missress Clarke と Lucy の家族のような関係がそれほど重要視されず、話の隅に追いやられてしまったのである。故に Missress Clarke は話の途中で退場せざるをえなくなる。Missress Clarke によって、ヒロインを支える女性使用人が、雇用関係なしに女主人と家族のような関係を築く場合、血縁者や結婚相手と比べると、その関係は弱く限界があることが示される。

Missress Clarke が Lucy との生活から感じる負担は、当時の社会に適合した主従関係から外れた場合の負担を表現している。そして Lucy と Missress Clarke の家族のような関係は、社会が認める家族になれる夫候補の語り手の登場によって、限界が明らかにされる。しかし擬似母子という家族のような関係に甘んじて階級を超えるのではなく、使用人の立場を保持して Lucy の新たな保護者を探し求める Missress Clarke の姿勢が、女主人と自分が置かれた不安定な状況から抜け出すきっかけとなったのも事実である。Hester と同様に Missress Clarke も、主従関係を崩さずに女主人を守りきった例として描かれている。

#### 4 使用人の限界

最後の *The Grey Woman* は三作品の中で最も使用人が活躍する話である。時代は革命の頃、フランスの貴族に嫁いだドイツ人 Anna は、夫の家の使用人たちに馴染めず、形ばかりの女主人として過ごす。この家では執事 Lefebvre をはじめ、

Anna を侵入者のように扱い、時には嘲るような態度を取る使用人たちも多く、孤独な結婚生活を送る Anna は、侍女として雇われた中年女性 Amante と急速に親しくなる。自分が仕える女主人を敬わない他の使用人たちと対立しがちな Amante も、一般的な侍女の役職によくあるように他の使用人たちとの交流に乏しく、Anna と Amante の主従関係はこの時点ですでに親密になっていたと思われる。周囲の人々と必要以上に関わらなかった Miss Furnivall と Mrs Stark の関係に近い二人は、後に閉鎖的な関係になる未来を暗示させる。

Amante は夫の犯罪を知った Anna と共に逃亡し、彼女の導き手となる。Amante は逃げるための知識や変装などの手段を全て考えて Anna に指示し、Anna も Amante に言われるままに従う。

She gave me directions — short condensed directions, without reasons — just as you do to a child; and like a child I obeyed her. (317)

この段階ですでに主従関係は逆転している。逃亡生活によって Amante と Anna の関係はより深まっていく。父が亡くなり、兄嫁に支配された実家に帰れない Anna は、完全に孤立した状態になる。この状況は Lucy と Mistress Clarke に似ている。しかし異なる点は、次の引用にある Amante の宣言である。

‘If madame will still be guided by me — and, my child, I beg of you to still trust me,’ said Amante, breaking out of her respectful formality into the way of talking more natural to those who had shared and escaped from common dangers — more natural, too, where the speaker was conscious of a power of protection which the other did not possess... (334)

Mistress Clarke と異なり、Amante の使用人の立場を超える意思を示すこの箇所から、二人の主従関係がほぼ完全に消滅し、Anna と Amante は運命を共にして守り守られる家族のような関係に変化したと解釈できる。

Amante の提案により偽装夫婦の生活を始めた Anna は、Amante に頼りきった状態で家の中に閉じこもる。追われている状態なので、Amante も Anna に外部と

の交流を持たせようとはしない。二人の関係は、Miss Furnivall と Mrs Stark の比ではないほど閉鎖性が強まっている。

Anna と生まれてきた娘を養う主人役を務める Amante だが、やがて彼女は死を迎える。社会的に家族と認められた Anna の夫の指示によって殺された箇所から、Amante と Anna の血の繋がりのない家族関係が、社会に否定されたと見ることもできる。しかも他の二つの短編の主従関係と異なるのは、Rosamond や Lucy には保護者となる夫の可能性が残されているのに対し、Anna はその夫に命を狙われるという、社会の保護から切り離された状態に置かれ続けている点である。Amante が死ぬ間際に Anna と子供を託したのが、後の再婚相手となる医者 Dr. Voss であるのも、Anna を守るには男性の力に頼らざるをえなかった Amante の限界を示していると思われる。しかし Dr. Voss との結婚は正式なものではないので、Anna は社会から隔絶されたままであると考えられる。

作中で主従関係にこだわり、使用人との同室を嫌がったドイツ人の貴族の女性は Anna に間違われて殺された。Anna が生き延び、Ursula が無事生まれるに至ったのは主従関係を越えた Amante がいたからこそ可能だった。しかし彼女は Anna のその後の人生までは守れなかった。Anna は Grey Woman と称されるほど外見が変わり果て、兄とは再会できたものの、結婚前の生活には戻れない。娘の Ursula は受け継いだ罪人の血のせいで、独身のまま一生を終える。他に頼る人間のいない閉鎖的な主従関係が迎える悲劇的な結末が、この話にも描かれている。

*A Tale of Two Cities* の Miss Pross は、女主人を殺そうとする Madame Defarge と対決し、逆に彼女を死なせてしまう。結果的に女主人の命を救えたが、その代償に彼女は聴覚を失った。同様に Amante も、孤独な女主人を生かすためには己の命を犠牲にするしかなかった。使用人が単身で女主人を守る際の困難さがどちらにも表れている。他の二つの短編と比べると、社会から切り離された状態の女主人と閉鎖的な関係を築く Amante は、かなり不利な立場に置かれる。使用人の立場を超えなければ Anna は助からなかったが、超えてしまったために代わりに Amante が命を落とした。身代わりになった Amante の最期は、当時の社会における女性使用人の限界を強調している。Gaskell は家族のような女性の主従関係を理想化せず、その負の部分をも描いていると思われる。

## 5 結び

十九世紀の Victoria 朝社会では、中流階級の女性たちにとって使用人は必要不可欠だった。今回取り上げた三つの短編では、ヒロインたちは血縁者あるいは夫から、過去の亡霊や呪い、罪人の血など否定的な要素を受け継ぐ。先行きの不安な状況の中、女性使用人の存在に彼女たちがどれほど救われたかを考えると、使用人の存在の重要性が見えてくる。

Mrs Beeton は、使用人に寛大さと分別を持って接すれば、より良い家庭空間が作れると述べている (Beeton 393)。Gaskell の使用人への態度に、この意図が含まれていたかは定かではないが、彼女の主張する家族や友人のような主従関係は、使用人たちに家族や友人そのものになることを意味しているのではない。むしろ忠実で身の程をわきまえ、労苦をいとわない作中の使用人たちの姿は、当時の社会が理想とする使用人を体現している。脇役として描かれつつも、彼女たちはそれぞれ何らかの役割を担った存在であると示される。

しかし彼女たちは社会的にも経済的にも非力な使用人であり、女主人たちを守り続けていくうちに限界が生じてしまうのも事実である。また通常の主従関係からの外れ方が、擬似的な母娘や夫婦などへと逸脱が大きくなるほどに、彼女たちが見舞われる悲劇は大きくなっていく。故にどの話でも、最後には、社会的に認められる家族となりえる男性に、乳母や侍女たちは女主人たちを託して退場する。

Gaskell は女主人と女性使用人の関係を、女性同士の連帯とはみなさず、時として閉鎖的になりかねない関係から生じる負の部分も描くことで、主従関係の限界をも表している。家族や友人のような関係を築きながらも、使用人たちは女主人と対等な立場である家族や友人そのものにはなれない。作中の女主人と女性使用人たちは、主従関係にあるからこそ強く結びついた。あくまで使用人の立場から女主人を支え続ける乳母や小間使いたちの姿から、読者は当時の使用人の可能性と限界を同時に垣間見る。使用人を重視していた Gaskell は、それ故に彼女たちの両方の面を作品に描くことができたのである。

## 注

本稿は 2007 年 6 月 2 日に実践女子学園渋谷キャンパスで開催された日本ギヤスケル協会第 19 回例会において、ワークショップ「ギヤスケルの短編 3 作を読む」で発表したものに基づいている。

## 引用文献

- Chapple, John A. V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Craik, Dinah Mulock. “A Woman’s Thoughts About Women.” 1858. *Pickering Women’s Classics: Rossetti and Craik*. Ed. Elaine Showalter. London: William Pickering, 1993. 102-115.
- D’Albertis, Deirdre. “The life and letters of E. C. Gaskell.” *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Matus. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 10-26.
- Gaskell, Elizabeth. *Gothic Tales*. Ed. Laura Kranzler. London: Penguin, 2000.
- Horn, Pamela. *The Rise and Fall of the Victorian Servant*. 1990. Stroud: Sutton, 2004.
- Humble, Nicola, ed. *Mrs. Beeton’s Book of Household Management*. 1861. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Nestor, Pauline. *Female Friendships and Communities*. Oxford: Clarendon, 1985.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. 1987. Manchester & New York: Manchester UP, 2006.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. 1993. London: Faber and Faber, 1999.

(青山学院大学大学院博士後期課程)

**Abstract**

**Female Servants in Short Stories of Elizabeth Gaskell**

---

**Misa HAYASHI**

---

The aim of this paper is to consider the representation of female servants in three short stories of Elizabeth Gaskell. Though some critics say that Gaskell praises their close bonds with mistresses, she also shows their exclusive relationships can be tragic. I am going to investigate those servant-mistress relations and see both possibilities and limits of them.